迷走少年

青蒼　藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷走少年

【Ｎコード】

Ｎ４９３５Ｘ

【作者名】

青蒼　藍

【あらすじ】

強い者は迷わない。だから俺は迷い続ける。何時だって迷走している。納得がいく結末にたどり着けるまでひたすら走り続ける。弱者であるのだから、迷って、迷って、迷い続ける。だから今回も俺は迷い続ける。納得がいくまでどれだけの距離を走る事になっても。

前編 - 迷走中

世の中には選ばなくてはならない時が必ず来る。その時、強い者は考えずとも答えを導くことでき、弱い者は迷って迷って答えを導き出す。

それが強い者と弱い者の違いだと思っていた。

そして、だから俺は弱い者だと自覚していた。

「推薦入試？」

思わず聞き返してしまった。その言葉は余りにも想定外で、予定外だった。

掃除の時にいきなり放課後になったら来いと言われて、てっきりこの前学校をサボったのがばれたのかと思っていた。

言い訳を考えながら恐る恐る職員室に行くと、担任に進路相談室に連れて行かれ、そう言われた。

「そうだ。推薦入試で〇〇大学××科を受けてみないか？」

そう言って担任は資料を渡してくる。〇〇大学は県内でそれなり

の国公立の大学である。

「この学科ならお前が志望している学科と近いことが出来て、満足の行く授業が聴けるだろうし、就職率も高いから進学後もいいだろう」

担任は資料を見ながら言ってくる。俺も資料を見ると、確かに就職率も高く、授業の内容もそれなりにおもしろそうだ。

その後も担任は大学についての説明を続けて行く、話を聞く限りではかなり満足が生きそうだった。

「それじゃあ、質問はあるか？」

説明が終わり、聞いてくる担任に対してまだまだ混乱していた頭だけど幾つかの疑問が頭の中に浮かんだ。

「えっとじゃあ何で俺なんすか？」

ぶっちゃけ、何で俺が学校から推薦を受けられるのか分からなかった。欠席（サボり）は多いし、成績だって普通だ。

「いくつか理由があるが、この学科と志望しているところが近いと言うことと、内申だな」

「内申は悪いですけど」

夏休み前に貰った通知表は赤はないが、英語とか文系科目はかなりギリギリに近かった記憶がある。

「まあ悪いところはあるが、理系科目だけで見ればかなりだろう。つまりそういうことだ。他には？」

理系科目を重視するってことかよ。まあそれなら納得はいく、釈然とはしないけど。

「推薦入試を受けるとして、どれくらいの可能性で受かるんですか？」

「それなりに高い確率で受かると思う。あくまでも私見だがな」

俺の質問に対して、担任は間髪いれずに答えた。この質問は予測済みだってことか。

なんだがこっちの考えていることが見透かされているみたいで良い気はしないな。まあ、とりあえずはいいや。

「次に推薦入試はどんなことをやるんですか？」

担任はあらかじめ用意していた資料を見ながら、答える。

「〇〇大学の××学科だと書類、面接、口頭試問の三つだな。準備できるのは面接と口頭試問だな」

「口頭試問？　それってなんすか？」

聞きなれない言葉が出てきたので、思わず説明の途中だけど質問してしまう。

「まあ色々だな。普通に問題を解いたり、解いた問題を説明したり、

あらかじめ解かれている問題を説明したり、まあそんな感じのことをやらされる」

要するに、普通の学力試験の簡易発展版みたいなモノか。

「これについては前年の問題は分かっているから、練習することはできるぞ」

担任は他にはと聞いてきたので、今のところはないですと俺も答える。

「じゃあ、最後に言っておくがこれは別に断ってもいいからな。答えは週明けには出してくれ。後、このことはクラスメイトには言わなよ」

性急かもしれないがすまないな。そう言って担任は資料を持って部屋から出て行った。

「どうするか」

悪い話ではないのは分かる。それでも何処か、何か、決めかねている。

とりあえず俺も部屋から出て行った。

まだ頭が混乱しているのか、それともただ気分が乗らないだけなのか、分からない。

けれどもどうも勉強をする気にならないので、教室に戻って鞄を掴んで学校をでる。

ぶらつく。適当にぶらつく。当てもなく歩き続ける。どうもまっすぐ家に帰る気にはなれなかった。

どうせ家に帰ったところで誰もいないし、いや今は一人いるけど。あれに相談してもなあ。まあ親父やおふくろがいた所で返ってくる答えは決まってる。

「お前の好きにしろ」

あの二人は俺に何かを期待している訳じゃないし、ただ好きにしろと言うだけ。

そんな事を考えながら、適当に歩いて、歩き続けて、気が付いたら。

「迷子になっていたとか笑えねえよ」

見たことがない風景ではない。むしろどこかで見たことがあるはずだけど。

「どう行ったら家に帰るのかが分からないんだよな」

見たことがない訳じゃないだけどなあ。でも道が分からないのと言うか、現在地が分からないと言うか。何と言えばいいのか分からない。

まあ、そんな感じに途方に暮れていた時だった。

いきなり真後ろから声をかけられた。

「あれ？　何であんたがこんな所に居るの？」

振り向いてみるとそこに居たのは中学の頃の同級生であり、高校は別の所に通っている昔の友人であり、現状では余り会いたくない相手だった。

「いや、何も言わなくてもいいわ。当ててあげるわ」

そう言って目を瞑ってこめかみのあたりに手を当ててう～んと悩むような声を上げて、正直言って無視しようかと思ったが、一応昔の友人なので答えを出すまで待ってやることにした。

「分かったわ。ズバリ」

いきなり目を見開いて大声を上げる。ああ、やっぱ無視すればよかった。

「ズバリ？」

「中学の時、俺は選ばれし者だとか、疼くな俺の△△とか言っていた時のことを思い出して悶々としていたら気が付いたらここに居たんでしょ」

「てめぇはどんだけ人の古傷を抉る気だよ！！！」

目をランランに輝かせながら言うバカを思いっ切り引っ叩きながら言う。

だから会いたくなかったし、話したくなかったんだよ。思いっ切

り俺がイタイ奴だった頃のことを十分過ぎるくらいに知っているからな。

「まあ、おふざけな会話はこれぐらいにして、ぶっちゃけ何で居るの？　偶然とか嘘だと丸わかりの解答はしなくていいからね」

「偶然なんだけどなあ」

偶然以外の何物でもないだけどなあ。正直にそう言うと意地の悪い笑みを浮かべて言う。

「この世中には偶然なんてない。あるのは必然だけだ。そんな事を言っていたのはどこの誰だったかなあ？」

とりあえず一発ぶん殴っておくべきなのか？　と言うかこれは俺に殴られたいという意思表示だよなあ。

「それで偶然だとして、一体何でいつもとは全く違うところに来るまで何も気づかなかったの？」

「考え事していた」

「一体何を考えてたんの？　ほら、お姉さんに言ってみい」

そう言って、今度意地の悪い笑みではなく、普通の優しそうな笑みを浮かべて手招きして言う。

昔からこういう奴だったなあ。少しだけ感傷に浸りながらも、今日起きたことを言う。

「ふ～～～ん。推薦入試ねえ。何か思いだすねえ。ちょうど三年ぐらい前だよね。似たような質問を私がした時そっちはなんて言ったのかなあ」

覚えてないな。言われるまで存在すら忘れていた。確かにそんなことを尋ねられたは覚えているけど、俺は何て答えたんだっけ？

「強い者は迷わない。だからお前も弱い者なんだから好きなだけ迷って悩めよ。それにお前の人生なんだから誰かに答えを求めるなよ。お前の好きに生きろよ。そう言ったんだよねえ」

三年前の俺は相変わらずと言うか何と言うか。

「冷(さ)めたと言うか冷(つめ)たいことを言ったモノだなあ。まあいまさらだけど悪かったなあ」

三年も前の事だが一応謝っておく。でもこいつはぽかんとして口を開けていた。そして次の瞬間には大笑いしていた。

「あはははは！！！　何を言ってるの？　あんたが言ったことは当たり前の事なんだから、謝ることなんて無いんだよ。だって自分の人生なんだから迷おうが悩もうが自分で決めなきゃいけないに決まっているんだよ」

「いや、確かにそうだけど」

「だけどなんてないんだよ。それだけが真実だよ。だから私が言えることもそれだけだよ。問う訳でさようなら～。また会いましょう。これ、私のアドレス」

俺のポケットに紙をねじ込んでくる。それだけするとさっさとその場から立ち去ってしまった。

徹頭徹尾相変わらずとしか言えないぐらいの自由さだった。昔からああいう奴だったなあ。

「帰るか」

そう言ってから自分が迷子だと言うことを思い出した。

「ただいま〜〜〜」

いつもよりも二時間近く遅れてようやく家に着いた。あれから三時間近くようやく歩き続けてようやく家に帰って来た。

途中で交番を見つけられなかったらまだ帰れなかっただろう。

「おかえり〜。今日は随分と遅かったなあ。夜遊びもほどほどになあ」

そんな感じに緩い声をかけてきたのは、家のニート姫こと姉貴だ。

「まだ夜遊びって言う時間じゃあないと思うんだがなあ。まあ、良いけど。それより親父とお袋は？」

「どっか行った？」

「何で疑問形なんだよ」

とりあえず靴を脱いで家の中に上がる。俺がリビングに行こうとすると、珍しく姉貴も後ろからついてくる。

何時もなら、すぐに部屋に戻っていくのに。一日の大半を自室に引きこもって過ごすのに。

リビングに行くと書き置きが残っていた。内容は毎度のことか。

「どうやらお袋はまた実家に帰ったらしいな。そしてまた親父はお袋を追って行ったと」

「お財布は置いてあるから良いじゃない？」

「それもそうだな」

うちの両親は毎月のように喧嘩して、お袋が出て行く。そして親父が追って家を出て行く。俺たちが子供のころから同じようにしているので、驚くにも値しない。

「何か買ってくる？　それとも出前でも取るか？」

冷蔵庫の中はモノの見事にすっからかんだ。作ろうにも材料がない。

「出前でいいじゃない。出て行くの面倒だし」

この引き籠もりが。

「今、この引き籠もりが。とか思ったでしょ。ふふふふ、言わなくても私には分かるんだよ」

「幾ら姉弟だからって人の心を勝手に読むなよ」

こいつは昔は神童とさえ言われるほどの天才児だった。年は3つしか違わないが、既に大学は海外と日本の二つを出ている。

「そんなに褒めてもお金くらいしか出ないぞ。実は今日もだいぶ儲かったからな」

「生々しいわ、ボケ。また株か？」

「むっふふふふ、その通り！　随分儲かったよ。何なら今日はお姉さまが驕ってあげてもいいよ」

本当に成人になっているかと思いたくなるくらいにぺったんこな胸を張ってそんな言われてもなあ。

普通に家の近くの安い店屋物に出前を頼む。

出前がくる前に部屋に戻って制服から部屋着に着替える。リビングに戻ってくると姉貴がニュースを見ているので、俺もぼんやりとそれを眺める。

頭の中には今日一日の事が思い出される。一日と言うよりは夕方のこと。

どうするか。週明けに答えを出せと言われても、今日を含めても

後3日しかない。本当に性急過ぎるんだよ。

そんな事を考えを断ち切るように、チャイムが鳴ったので出る。出前が来たようなので、それを受け取り、代金を払う。

「待ちかねたよ、いただきます」

リビングまで持って行くと待ちかねていたようしていた姉貴の前に置くと、俺が座る前に一人で勝手に食い始める。

俺も席に着いて、いただきますと言って食い始める。やはり中々旨い。この値段でこれなら上々だ。

基本的に食事中に会話がない。俺と姉貴だけの時ならなおさらだ。会話がある方が珍しい。

「ごちそうさまでした。ふ〜〜〜、食べた食べた」

食い終った皿を片して、玄関の外に置いておく。

さてと部屋に戻ろうかと思ったが、何となくリビングに戻ってきた。そこには珍しく食事が終わったのに姉貴がリビングのソファで寝っ転がっていた。

「さてといい加減待っているのも飽きたし、そろそろ聞こうか」

いきなり姉貴が起き上がって、ジッとこっちを見てくる。その眼に見られると、どうも心の中を全て見透かされたような気がする。

そして姉貴はやや芝居がかった口調で言う。

「さて我が愛しの弟よ。一体何を悩んでいるんだい？」

何を言っているのかはわかるけど、言いたくない。姉貴にだけは相談したくなかった。

「まあ言わなくてもお前がどう思っているかぐらいは分かるんだよ。でも一応聞いているんだからちゃんと答えろよ」

うわ～。珍しく本気で姉貴が起こっているなあ。口調が命令口調になっているし、この年になって姉貴とマジ喧嘩はあんまりしたくないな。

親がいない今喧嘩になったら下手したら、どっちかが気絶ぐらいの怪我をするまで止まらない。俺も姉貴も一度頭に血が上ったら止まらない。

「はあ～～～。分かった。いや、分かりました。俺が悪うございました。どうかこの無知な弟に知恵を貸してください」

俺が折れた。推薦のことを話した。全て余すところなく、話した。

「そういうことだったのか。なら、無理に聞いて悪かった」

話を聞いて姉貴は素直に謝った。分かったのだ。これは自分に相談されても答えを出せるモノじゃない。

「これはお前の問題だからなあ。下手に他人に何か言われて流されたら、ダメになるだろ」

「分かってるから言わなかったんじゃないか」

自覚はしているから何も言うつもりはなかったのだが。まあ今さらと言うモノだ。

「まあ一応聞いた身だしアドバイスしていいけど、聞く？」

「聞くよ。そこまで分かっているなら変なことは言わないだろ」

一応それなりには姉貴のことは信頼している。尊敬は出来なくとも、姉貴が信頼できることぐらいは分かっている。

「まあ大したことは言えないけど、ただ一つ言えることはどんな形であれ答えは出しなさいよ。週明けには自動的にタイムアップになるんだから、それまでに納得のいく答えを出しなよ。じゃないと後悔するから」

そこで一度区切り、再度こちらを見据えて続ける。

「私にはなんでお前が悩んでいるのか理由が分からない。だからどうすれば最善なのかはわからない。もしもお前も何で自分が悩んでいるのか分からないのなら、問題を分割して、細分化して考えてみればいいんじゃない」

そこで区切って、悩むように考えてから言う。

「まあ後はないね。まあ本格的にアドバイスつもりはないし、所詮自分の人生は自分で決めないとね」

それだけ言って姉貴はさっさと自分の部屋に戻って行った。

結局、最終的に言われたことはあいつと同じ。

「自分のことなんだから自分で決めないとな」

俺は弱者なのだから悩んで、迷って、足掻いて、惑って、苦しんで、泣いて、嘆いて、憤って、ひたすら迷走して納得のいく答えを出すしかないのだから。

それがたとえどんな結末だろうと納得のいくものでなければ、俺は前に進めないのだから。

たった一歩を進む為にどれだけ迷走をしたとしても、その一歩を満足いくものにするために。

俺は納得がいくまでひたすら迷走し続けることにした。

後編 - 迷走の結果

「結局、答えが出せなかった」

今日は担任との約束の週明け。俺は何も答えを出すことが出来なかった。悩んで、考えて、寝る間も惜しんで考えたけど答えが出なかった。

「と言うか、俺は何を悩んでいるんだ？　こんな良い話し断る理由がないのに」

推薦入試が決まれば、センターの結果に関係なく大学が早い段階で決まる。担任からは高確率で受かると太鼓判も押してもらえている。

それなのに何か胸の中に引っ掛かっている。何ともやりきれない感じが残っている。このまま推薦を受けてもいいのか。

こんな状態じゃあ絶対にどう言う結末になったとしても後悔する。この胸の中に引っ掛かっているモノが何か分からない限り、俺はどうすることもできない。

そんな事を考えている間にも確実に時は進む。歩きながら考えていたら、気が付いた時にはすでに学校の校門の前だった。

「あ〜〜〜、ここまで来て何だけどサボろうかな」

逃げて、タイムアップのなし崩し的な敗北を選ぼうかな。そんなこと本気で考えながら、学校の敷地に入ることが出来ずに校門の前でうろうろしていた。

「あの～？　一体センパイは何をしているんですか？」

「うぉおお！！！」

いきなり後ろから声をかけられて洒落じゃなくて驚いた。かなりでかい声を上げてしまった。ちらほらだが登校していた生徒が一斉にこっちを見てきた。

視線が痛いがとりあえず気にしない。全身に刺すような視線を浴びるけど無視無視気にしない。何事もなかったように後ろを振り返り、声をかけてきた張本人をみる。

「久しぶりだな、後輩。朝から一体何用だ？」

「いや、まあ知り合いがサボろうかな～とか言いながら校門の前で不審者の如くうろついていましたけど、さすがに無視して行くのは失礼かと思いましたけど。今は本当に後悔しています」

どうやら注目を浴びていしまっていることが相当ご立腹なようだ。まあ当たり前か。

「それは悪かったなあ。まあ気にするな」

「相変わらず適当に生きてますね、センパイは」

この後輩の毒舌も相変わらずだな。二年半も付き合っているので

この程度の毒舌はあいさつ程度しかない。

「後輩よ。そう言えば俺たち三年が引退してから部活はどうだい？」

こいつとは元々部活で知り合った。元文芸部、現在名前募集中の部で出会った。何をやっている部活かと聞かれれば、何だろうと言うしかない。

対面的には文芸部として活動していることになっていたが、引退するまで結局そういう活動した記憶はない。いつもバカ騒ぎしていた気がする。ただ騒いで楽しんでいた気がする。

「良くも悪くも平凡ですよ。でもいい加減、誰かが何かやらかしそうですけど」

そんな事を思いながらも、口に手を当てながら笑顔でそう答える後輩を見ていると、そろそろおもしろそうなことが起きそうなことがよく分かる。

自分が関われないのが残念だが、それでも楽しそうである。

「さてセンパイいい加減はぐらかさないで何で校門の前で不審者をしていたのですか？」

「別にちょっと考えごとしながら歩いてたら、何と無く学校に行きたくなくなっちゃっただけだよ」

１００％嘘ではない。真実が含まれた嘘。これなら見破れるはずはない。

「嘘ですね、センパイの嘘はわたしにはすぐに分かるんですから吐いても無駄ですよ」

どうして俺の周りにはこうも、人の嘘を見破る人しか集まらないのだろうか。

「分かったよ。全部説明してやるよ」

仕方なく、後輩に推薦入試の一件を全て話した。嘘偽りなく話した。

「なるほど、そういうことですか。相変わらずヘタレで優柔不断なセンパイらしいですね」

「うっせえよ」

人の話を聞いてすぐに毒舌を吐く後輩に何時も通りのやりとりをかわす。

「にしても、そういうことですか。もしも何かを期待しているのなら、殺気に言っておきますけど私から言えることはありませんよ」

「まあそうだよな」

そんなつもりはなかったが、それでもこの後輩なら何か良い知恵を貸してくれると思っていた反面もある。

「だってこれはセンパイの問題何ですから。私が口を出していい問題じゃあないでしょ」

「分かってますよ。分かってますよ。これは俺の問題なんだからな。後輩のお前に言われなくてもそれぐらい分かってますよ」

分かっている。自分で決めなきゃいけない事ぐらいことは最初から分かっている。

「そうですね。センパイは分かっているけど、気づいてないんでしょうね」

「気づいてない？」

俺がそう聞き返すと、何か含んだような笑みを浮かべて後輩は何を言う訳でもなくこちらを見ている。

「何だよ？　一体俺が何に気づいていないんだよ？」

再度聞くと、今度はゆっくりと口を開いた。

「気づいてないだけじゃないんですよ。見ようとすらしていないんですよ」

「意味が分からん。頼むからもう少し俺にも分かる言葉で話してくれ」

後輩は稀に見るほどの満面の笑みで答えてくる。

「い・や・で・す」

それだけ言うと満面の笑みのまま部屋から出て行く。そして出て行く前にちらりとこちらを見て再度笑って去って行った。

「はあ、俺も戻るか」

結局、答えが出ないまま重い足取りで教室に向かった。

「それでどうすんだよ」

うわ～、怖～～い。うん、ごめん。洒落にならないくらいに怖かったんだよ。

そもそも何でこんなに威圧たっぷりの人間が教師なんかやってんだよ。この学校の査定はおかしんじゃねえのか！

「まだ決めてません。どうか後一日だけ待ってください！！！」

まさか高校に入ってまで校内で土下座する羽目になろうとは色んな意味で悲しいぞ。しかも相手が担任の教師とは笑えねえぞ。

「世の中土下座一つで如何にかなると思っているか、お前は」

「思ってません」

この担任が土下座一つで許してくれるとは微塵も思ってはいない。

「それでも土下座をするお前の度胸とアホ差加減は感心してもいいが、後一日は待ってもいいもいいが、それで何が決まるんだよ」

三日与えて答えが出ないバカが後一日で答えが出るのかと言いた

いのだろう。まあ正気言ってその通り過ぎて文句も言えない。

「つうか、お前は何を悩んでだよ。今回の件、お前にはメリットしかないのに何を悩んでいるんだよ」

「それが分かったら、ここまで悩んでませんよ」

思わず本音が漏れた。何を悩んでいるのか分からない。良い話なのは分かっているのに、それでも何かすんなりと受け取ることが出来ないでいる。

「そうか。まあ、そんなもんだよなあ。お前何だかんだ言ってそういう奴だもんなあ。仕方ないと言うより、これが必然か。問題は気づくかどうかだが、まあ分かった。後一日だけ待ってやる。だからさっさと決めろ」

いきなりそれだけ言うと、勝手に納得したようでさっさと席を立って部屋から出て行ってしまった。

全くわけが分からないが、とりあえず後一日だけ時間を貰えたようだ。

「やばい。半日近く考えても何にも答えが分かんねえ」

授業中もひたすら考え続けたが何にも答えを出せずにもうすぐ放課後だ。このままだと結局何も答えを出せそうにない。

どうしたらいいんだよ。

「何てことを考えている内に、また迷子になるとかどんだけ学習能力がないんだよ」

しかも今回はすでにけっこう暗いし、すこし肌寒くもなって来た。

「近所で迷子で凍死とか、洒落にならないぞ」

と言うか、恥ずかしすぎて死にたくなるぞ。まあこれくらいの寒さなら、凍死しないだろうけど、さすがに風邪くらいはひく。

「ああ、でもよく考えると家にも帰りたくないんだよなあ」

家に帰ったら、絶対に姉貴に聞かれるだろ。答え出してませんとか気まずすぎるだろ。

どうすんだよ。よく考えたら答え出すまで家に帰れないぞ。

「何マジで俺って今ホームレスの一歩手前状態？」

とりあえず考えながらも適当に歩き続ける。意味もなく歩き続ける。

まさに心身とも迷走していた。

歩き疲れた。仕方なく近くに見えた公園に会ったベンチに座る。近くの自販機で買ったコーヒーをちびちびと飲む。

「あ～、温かい」

冷たく冷え切った身体に沁み込むように身体に熱が吸収されていく。

「しっかしどうするか」

どれだけ考えても答えが出せない。

受けるか、受けないか。ただそれだけのことのはずなのに。たったそれだけのことなのに。

合理的に考えれば、これほど簡単な二者択一の問題はないはずだ。

「なのにどうしてこれだけ悩むんだよ」

誰にでも無く言ってしまう。泣き言を、言い訳を言ってしまう。

これ以上なく簡単なはずなのに、どうして俺は渋っているんだ。

分かっている。自分の中にあるこのもやもやなモノを無視してしまえばそれで済んでしまう。

それなのにどうしてそれが出来ない。

どうしてもそれを選ぶことが出来ない。

ここで全部を無視したら、自分が自分でなくなってしまうような気がする。

相談した全員に言われたこれは俺の問題だ。だから俺が納得できなきゃ、ダメなんだよ。

出そうとしている答えがどれだけ愚かしくても、俺以外の全ての者が笑おうとも、俺だけが満足できればそれでいいんだよ。

グシャリと鈍い音がしたと思ったら、手に鋭い痛みが走ってた。

「何やってんだよ、俺は」

手に持っていた飲み切った缶を握り潰していた。潰れた缶の断面で掌を何ヶ所か切ったらしい。

「本当に何をやってるんだよ」

握りつぶした空き缶を近くのゴミ箱に投げ捨てる。

切った掌がズキズキと痛む。痛みと寒さでいつも以上に血の流れを感じる。

全身に血が流れて行くのがよく分かる。末端の冷え切った血が心臓に流れ込み、その血が頭の中にまで流れて行くような感覚すら生まれてきた。

でもおかげで頭が今までにないぐらいに冷え切って異常なほど冷静に考えられる気がする。

そして答えに至る。

いや分かったのだ、この問いはどうやっても俺の満足のいく答えは存在しない。

「ここで推薦を受けても俺の中にあるもやもや晴れないままだし、受けなかったとしても受験に失敗した時、推薦を受けていればと言う後悔が生まれる。どうやったって無理じゃんか」

おれが満足のいく答えは存在しない。

どうやってもバットエンドしかない。

本当にそうなのか？　何度も考えてみる。でも帰結する答えはこれしかない。

「だったら俺はどうすればいいんだ？」

行き着く先が地獄だと分かっても俺は選ばなくてはならない。どちらの地獄を選ぶのか、最悪でしかない道を。

「本当にそうなのかしら？」

俺の声ではない声が響いた。面を上げて見るとそこに居たのは金曜に再会した友人であった。

「お前なんで？」

俺がそう聞くと、にんまりと微笑んで彼女は返す。

「そんなことを聞きたいんじゃないでしょ。本当に聞きたいのはそんなどうでもいいことじゃないでしょ。本当に聞きたいのは、本当に聞かなきゃいけないのはそんなことじゃないでしょ」

俺が本当に聞かなきゃいけないこと。それは考えなくても分かる。

それは。

「俺はどうしたらいいんだ。未来に絶望しかなくても俺は未来を選ばなくてはいけないのか？」

「選ばなきゃいけないに決まってるじゃないか。だって君の未来だよ。他の誰のでも無い自分の未来なら。自分で選べ」

間髪いれずに言う。俺が何か言おうと口を開けるが声が出ない。こいつが正しいと分かっているからなおさら何も出ない。

そして続けて彼女は言う。言い続ける。

「そもそも未来に絶望だけなんてありえない。君は自ら自分の希望しかない未来を潰している。他の皆にはその未来が見えているのに、君だけ自分の可能性を自分で潰して嘆いているんだよ」

こっちを睨みつけるようにしっかりと見てから彼女は言う。

「ふざけるなよ。いつまでも本気を出さないで、言い訳とか、逃げ道を自分で作るなよ。本気でやれよ。自分のことを弱者扱いするなよ」

言葉に怒気を孕ませ、俺の胸ぐらを掴んで躊躇も減ったくれもない全力の力で俺を引き寄せて、大声で言う。

「逃げるな！！！　惑うな！！！　迷走して動いている気なるな！！！　腹を括って、前だけ見据えろ！！！　お前の道はお前が作り出せ！！！　逃げ道なんてくだらないモノ作っている暇があったら、目の前を道を真っ直ぐ歩め！！！」

「それが後悔しない人生だ！！！」

夜の闇の中を引き裂くぐらいの大声で叫ぶ。

その言葉は俺の中にずしりと重くのしかかった。でもおかげでもやもやは消えていた。

彼女は俺の胸ぐらを離される。ドンとベンチの上に尻もちを付くように落ちる。

「これが私に言える全ての事だけど、答えは出たかい？」

ゆっくりと今までとは打って変わって落ち着いた声尋ねる彼女の方を俺はしっかりと自分と力で見捨えて言う。

「ああ、出たよ。ありがとな」

「別に良いよ。昔の恩返しだよ。それでどうするんだい？」

俺の言葉を聞いて優しい笑顔になって尋ねてくる彼女に俺は胸を張って答える。

「簡単だよ。実力で、自分の力だけで、俺の志望校に合格する。ただそれだけだよ」

今の俺の学力じゃあ志望校には遠く及ばない。だけど、それが何だ。死ぬ気で勉強すればいい。

逃げ道なんて作らない。本気で残りの期間を全て受験勉強にあて

るだけだ。

それで失敗したとしても、いや失敗することなんて考えない。

逃げ道も、言い訳もなく、全力で他の可能性なんて考えずに進み続ける。

「それしかないだろ」

「まあ、そうだね。それしかないのだから頑張って」

俺はベンチから立ち上がる。友人に別れを告げて家路に着く。

早く家に帰ろう。一分一秒たちとも無駄にできない。

歩むべき道は分かっている。もう迷っている時間はない。

もう迷走をしている暇なんて無いのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4935x/

迷走少年

2011年10月25日02時05分発行